

一 パン屋の土曜日

土曜日の朝、蓮^{れん}は自転車で、商店街のはずれにある小さなパン屋へ向かった。

この店のメロンパンを買うのが、三年生のことからの、蓮の土曜日の決まりだった。外はかりつとして、中はふわふわで、まだあたたかい。店のおばさんは、蓮の顔を見ただけで、だまって一つふくろに入れてくれる。

初めてこの店に来たのは、母といっしょだった。そのとき、おばさんが、おまけよ、と小さなクッキーをくれた。それからずっと、蓮はこの店に通っている。

ペダルをこぐ足は軽かった。今日はおこづかいで、弟の分も買うつもりだった。弟は、まだこの店のメロンパンを食べたことがないのだ。

ところが、店の前に自転車を止めたとき、ガラス戸に白い紙がはつてあるのが見えた。今月の終わりで店をしめること、長い間ありがとうございました、ということが、ていねいな字で書いてあった。

蓮は、しばらくその紙の前から動けなかった。

「いらつしゃい。……ああ、見ちゃったか」

おばさんが戸を開けて、出てきた。いつもの白いエプロンに、こながついている。

「おじさんがね、こしをいためちゃったの。朝早くからパンをこねるのが、もうむずかしいのよ。蓮くん、いつも来てくれて、ありがとうね」

「……うん」

蓮は、それしか言えなかった。おばさんはいつものように、メロンパンを紙ぶくろに入れてくれた。弟の分も、と言うと、もう一つ入れて、お金は一つ分しか受け取らなかった。

帰り道、蓮は自転車に乗らずに、おして歩いた。商店街のシャッターが、行きよりも多くしまっているように見えた。空にはうすい雲が広がって、日の光がぶくなっていた。パン屋のあまいにおいが、後ろからまだ追いかけてくるような気がした。

紙ぶくろの中のメロンパンは、まだあたたかかった。そのあたたかさが手に伝わってくるたびに、むねのおくが重くなった。来月の土曜日には、もうこのパンはない。おばさんのいらつしゃいという声も、もう聞けない。そう思ったとたん、静かな悲しみが、体の中にじわじわと広がっていった。

家に着くと、弟がげんかんまでかけてきた。

「お兄ちゃん、メロンパン」

蓮は、紙ぶくろを弟にわたした。弟は一口かじって、おいしい、と笑った。

その笑顔を見ていると、蓮も少しだけ、口もとがゆるんだ。けれど、自分の分には、なかなか手がのびなかった。

「お兄ちゃんは、食べないの」

「……あとで食べる」

蓮は、メロンパンをふくろに入れたまま、テーブルのはしに置いた。パンは、少しずつ、さめていった。

課題一

気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二

気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

二 いとこの帰った日

夏休みの一週間、いとこの湊^{みなと}が、ぼくの家にとまりに来ていた。湊は小学一年生で、ぼくの部屋にふとんをしいてねた。

湊は、どこへでもぼくについてきた。ゲームをしていると横からのぞきこみ、宿題をしていると、つくえの下にもぐって足をつつく。トイレにまで、ついてこようとしたこともある。夜は、ぼくが電気を消そうとすると、かいじゅうの絵本を持つてくる。

「拓海^{たくみ}にいちゃん、これ読んで」

「もう三回読んだら。自分で読めよ」

そう言いながらも、ぼくは毎晩読んでやった。でも本当は、少しくんざりしていた。早く自分の部屋を、一人で使いたかった。

日曜日の朝、おばさんが湊をむかえに来た。

「にいちゃん、またね。また来るからね」

湊は車のまどから身を乗り出して、何度も手をふった。ぼくは、げんかんの前で一回だけ手をふり返した。車が角を曲がると、ぼくは大きくのびをした。これでやっと、部屋を広く使える。

その日の午後、ぼくは部屋で、ずっとやりたかったゲームを始めた。じゃまをする者は、だれもない。それなのに、ゲームの中で、ぼくは何度も同じ場所で行われた。けれど、三十分もしないうちに、ぼくはコントローラーを置いた。

部屋は、しんとしていた。ふとんをかたづけたあとのゆかが、ぼつかりと広い。エアコンの音だけが、低く鳴りつづけている。

ぼくは、つくえの上の絵本を手にとった。湊がわすれていたものだ。ページをめくると、最後のページに、紙が一まいはさまっていた。

クレヨンでかいた絵だった。大きな男の子と小さな男の子が、手をつないでいる。上には、ゆがんだ大きな字で、たくみにいちゃん、と書いてあった。二人の後ろには、絵本のかいじゅうも、ちゃんとした。

ぼくは、その絵をしばらく見ていた。それから、絵本の最初のページを開いて、声に出して読み始めた。毎晩、湊が、つづきは、とせがんだ話だ。今日は、その声がどこからも聞こえてこない。

三回も読んだはずの話なのに、最後のページで、ぼくの声は小さくなった。

まどの外では、日がかたむき始めていた。オレンジ色の光が、湊のねていたあたりのゆかを、細長くてらしている。

やっと一人になれたのに、ちつともうれしくない。自分でも、それがふしぎだった。

ぼくは絵を、セロハンテープでつくえの前のかべにはった。少しななめになったので、一度はがして、まっすぐにはり直した。

夕ご飯のとき、ぼくは母に聞いた。

「湊、今度はいつ来るの」

母は少しおどろいた顔をして、それから、ふっと笑った。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

三 しょうぎ大会

「負けました」

ぼくは頭を下げた。声が、自分でもおどろくほど小さかった。向かいで三年生の小春^{こはる}が、「ありがとうございました」とはつきり言った。

しろうぎ教室の秋の大会で、ぼくが負けたのは初めてだった。しかも相手は、春に入ってきたばかりの子だ。ぼくはばんの上のこまを、だれよりも早く箱にもどした。指先に力が入りすぎて、こまがかちかちと音を立てた。

「悠人^{ゆうと}くん、さっきの対局、いつしよにふり返ろうか」

先生が声をかけてくれたが、ぼくは「用事があるので」と答えて、上着をつかんだ。本当は、用事なんて何もなかった。

外に出ると、西の空が赤くそまっていた。道の上に、ぼくのかげが細く長くのびている。ぼくはくちびるをかんで、足もとの小石をけった。小石は道のわきのみぞに落ちて、見えなくなった。

通りの向こうから、同じ教室の子たちの笑い声が聞こえてきた。ぼくは顔をふせて、わざと反対がわの道に曲がった。

家まで半分ほど来たところで、ぼくは足を止めた。水とうを教室に置いてきたのだ。もどりたいはなかった。でも、あの水とうは、母に買ってもらったばかりだった。

教室のドアを少しだけ開けると、まだ明かりがついていた。おくのつくえで、小春と先生がばんをはさんで向かい合っている。ならんでいるのは、さっきのぼくとの対局だった。

「ここで、もし角を打たれてたら、わたし、負けてました」

小春の声は、少しふるえていた。先生がうなずくと、小春はこまを何度も動かして、その手を確かめた。勝った小春のほうが、ずっとしんけんな顔をしていた。ばんの横のノートには、細かい字がびっしりとならんでいた。

ぼくはドアのすき間から、ばんを見つめた。そこに角を打つ手は、ぼくも一度は考えたのだ。こわくなくてやめた手だった。はずかしくて顔が熱いの、ばんから目がはなせなかった。

そのとき、先生がこちらに気づいて手まねをした。ぼくは目をそらしかけたが、水とうを取るふりをして中に入った。

「悠人くんは、どこで角を打とうと思った」

先生に聞かれて、ぼくはだまってこまを一つ手に取った。それから、ばんの真ん中に、ぱちんと置いた。小春が「あつ」と声を上げて、ぼくの顔を見た。

「次は、ここに打つから」

ぼくが言うと、小春は「じゃあ、わたしはこうします」と、すぐにこまを動かした。ぼくはまた考えこんだ。まどの外はもう暗かったが、ぼくはなかなか帰ろうとしなかった。

三 しょうぎ大会 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

四 うさぎの水

「美月^{みづき}先ばい、水、かえないんですか」

金曜日の放課後、飼育^{しいく}小屋の前で、四年生の陸^{りく}が水入れをかかえていた。飼育委員の当番は、六年生と四年生の二人組だ。小屋の中では、白いうさぎが、わらの上で丸くなっていた。

「まだ半分入ってるし、月曜でだいじょうぶだよ。ごめん、今日は急いでるの」

美月はランドセルをゆすり上げた。友だちの家で、新しいゲームをする約束をしていたのだ。陸は何か言いたそうに水入れを見ていたが、美月はもう校門のほうへかけ出していた。

土曜日^ども日曜日^{にち}も、よく晴れて暑かった。美月は友だちと遊んで、うさぎのことは一度も思い出さなかった。日曜日の夜、テレビで「今年いちばんの暑さでした」と言っていたが、それも氣にとめなかった。

月曜日^{げつ}の朝、美月が小屋に行くと、陸が先に来ていた。水入れには、すぎとおった水がいっぱいに入っている。

「あれ、もうかえてくれたの」

「……土曜日^どに、お母さんと来たんです。氣になつて」

陸は小さな声で言った。土曜日^どに来たとき、水入れは空っぽだったという。うさぎは小屋のすみで、ぐったりと横になっていたらしい。新しい水を入れると、顔をつつこんで、いつまでも飲み続けたそう^だ。

「用務員さんにかぎを開けてもらつて、日曜日^{にち}も来ました。もう元氣です」

うさぎは陸の足もとに寄つてきて、鼻をひくひくさせていた。美月は返事ができなかった。金曜日^{きん}、自分は「だいじょうぶ」と言った。何も確かめないで、あんなに軽く言ったのだ。

小屋のあみごしに、朝の光がななめにさしこんでいた。その光の中で、水入れの水がきらきらとゆれている。美月は、その水をまともに見ることができなかった。

うさぎが元氣で、本当によかったと思う。それなのに、ちつとも笑えない。胸の中に、重い後悔が広がっていった。

美月はしゃがんで、うさぎの背中にそつと手を当てた。あたたかかった。

うさぎは鼻をひくひくさせて、美月の指先^{さき}のにおいをかいでいた。陸は、美月を一度もせめなかった。

「陸くん、ありがとう。それから、ごめんね」

陸はびつくりしたように顔を上げて、首を横にふつた。

その日の昼休み、美月は職員室で当番表をもらってきた。そして、金曜日^{きん}のらんに、自分の名前を赤い字で書き足した。それから、水入れの横に「金曜日^{きん}は、かならず水をかえる」と書いた紙をはった。

四 うさぎの水 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

五 貝がらのびん

おばさんの家に着くと、わたしはくつをぬぐのもしどかしく、ろうかをかけた。

「航くん、海に行こう。貝がら、今年もいっぱい拾おうよ」

二階から下りてきた航は、去年よりずっと背がのびていた。声も、少し低くなっている。日に焼けたうでも、がっしりと太くなっていた。

「ごめん、七海^{ななみ}。今日は部活の友だちと約束があるんだ」

航は、つりぎおのケースをかたにかけて出ていった。げんかんのドアが閉まる音を、わたしはろうかに立ったまま聞いていた。

去年までは、夏休みのたびに二人で浜に行った。貝がらを拾っては、どちらがきれいなを見つけるか、きそい合った。航が中学生になっても、それは変わらないと思っていた。わたしは、すっかりがっかりしていた。

夕方、わたしは一人で浜に出た。空はオレンジ色から、だんだんむらさきに変わっていく。よせる波が、わたしの足あとを一つずつ消していった。わたしは貝がらを三つだけ拾って、ポケットに入れた。家にもどると、おばさんが「航の部屋のうちわ、取ってきてくれる」とたのんだ。

航の部屋は、知らない人の部屋みたいだった。かべにはサッカー選手のポスターがはってあり、つくえの上には中学の教科書が積んである。うちわを探してたなを見上げたとき、わたしは手を止めた。

たなのいちばん上に、ガラスのびんがならんでいた。一つ、二つ……全部で五つある。どのびんにも貝がらが入っていて、ラベルがはってあった。「七海と、一年目」「七海と、二年目」。航の字だった。

わたしはびんを一つ手に取った。中で、小さな貝がらがかりと鳴った。わたしが「これ、いちばんきれい」と言ったら航にあげた、ピンクの貝もあった。

びんのふたには、どれも白くほこりが積もっていた。指でなぞると、そこだけ線のようにすき通った。

わたしはびんを、そつと元の場所にもどした。胸のおくがあたたかいのに、同じところが、きゅつとしめつけられる。わたしは、しばらくたなの前から動けなかった。

夜になって、航が日焼けした顔で帰ってきた。夕ごはんのあいだ、航は部活の話ばかりしていた。わたしの知らない名前が、次々に出てきた。

「七海、明日の朝なら、少し時間あるけど。浜、行くか」

「……うん」

わたしはポケットの中の三つの貝がらを、にぎりしめた。来年の夏、航はもう、浜に行こうとは言わないかもしれない。それでも明日は、いちばんきれいな貝を見つけて、航にわたそうと思った。

五 貝がらのびん 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

六 図書だより

「図書だより」の十一月号ができ上がったのは、金曜日の朝だった。真央^{まお}は図書委員になってから、毎月この新聞を書いている。今月は「冬に読みたい本」を五きつえらんで、それぞれに小さな絵をそえた。

昼休み、真央は各クラスに配った新聞のようすを見に行った。三年生の教室の前を通ったとき、足が止まった。

ろうかのごみ箱に、図書だよりが丸めて捨てられていた。一まいではない。上のほうだけで、四、五まいはある。教室の中では、何人かの子が新聞のうらに、線を引いてゲームをしていた。だれも、ろうかの真央には気づかなかった。

真央はごみ箱から一まい拾い上げて、しわをのぼした。真央が二日かけてかいた雪だるまの絵が、まんなかで折れ曲がっていた。

図書室にもどつても、真央は当番の仕事に手がつかなかった。カウンターのはしで、新聞のしわを指でなぞっていた。当番の仲間に話しかけられても、「うん」としか答えなかった。

夜おそくまで絵をかいたことも、何度も読み直してしようかい文を書いたことも、全部むだだった気がする。体から、すうっと力がぬけていく。むなしさが、じわじわと胸に広がった。

帰り道、空は灰色の雲におおわれていた。かれ葉が風にふかれて、道のはしにたまっている。真央はランドセルのかたひもをにぎって、その葉をよけもせずに歩いた。

家に帰ると、二年生の弟の蒼^{そう}が、リビングの床にねそべっていた。何かに色えんぴつで色をぬっている。

「おねえちゃん、見て」

蒼がかかげたのは、図書だよりだった。真央のかいた雪だるまに、赤いマフラーと青いぼうしがぬつてある。しょうかいした本の題名のうち、一つに大きな丸がついていた。

「これ、おねえちゃんが書いたんでしょ。先生が言ってた。ぼく、明日この本借りるんだ。くまが冬に起きちゃう話」

真央は、自分の書いたしようかい文を思い出した。冬にねむれなくなつたくまが、雪の森を歩く話だ。二年生でも読めるようにと、わざとひらがなの多い本をえらんだのだった。

「……その本、最後がいいんだよ」

「言わないで。自分で読むから」

蒼は両手で耳をふさいで、ころころと笑った。真央も、つられて少しだけ笑った。ほっとしたような、まだ少し悲しいような、ふしぎな気持ちだった。

ランドセルの中には、しわしわの一まいが入ったままだ。真央はそれを取り出して、ていねいに折りたたみ、引き出しにしまった。それから、十二月号の下書きのノートを開いた。

六 図書だより 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

七 二十五メートル

進級テストの結果の紙には、今回も「不合格」と書いてあった。四回目だった。

二十五メートルのクロールで、ぼくはいつも十五メートルあたりで立ってしまふ。息つぎで顔を上げると、水を飲んでしまうのだ。プールサイドで次の練習の説明を聞きながら、ぼくはゴーグルのゴムを意味もなく引っぱっていた。同じころに入った子たちは、もう平泳ぎの練習をしている。

家に帰ると、ぼくは紙を小さくたたんで、つくえの引き出しのおくにおしこんだ。ぬれた水着はバッグから出さずに、げんかんに置きっぱなしにした。来週からは、もう行かない。母には、そう言うつもりだった。

次の日の日曜日、母が近所の結衣ちゃんを、市民プールに連れていくことになった。結衣ちゃんのお母さんが、急な仕事で出かけたのだ。ぼくも、むりやりついて行かされた。

結衣ちゃんは一年生で、まだ顔を水につけられなかった。水面に鼻先が近づくと、ぎゅつと目をつぶって、すぐに顔を上げてしまふ。母はプールサイドのベンチから、ぼくたちを見ていた。ぼくはしかたなく、結衣ちゃんの手を引いて、浅いほうのプールに入った。

「こわいよ。息ができなくなっちゃう」

「口から、ぶくぶくって息をはけいいんだよ。はいてるあいだは、水は入ってこないから」

言ってから、ぼくははつとした。それは、ぼくが一年生のときに、教室の先生から教わったことだった。あのころのぼくも、顔をつけるたびに泣いていた。

結衣ちゃんは何度も失敗した。それでも、ぼくの手をにぎったまま、また水に顔を近づけた。七回目に、ぶくぶくとあわが上がり、結衣ちゃんの頭がすっぽり水にすんだ。

「できた。陽太くん、見てた。できたよ」

結衣ちゃんは顔じゅうから水をたらして、ぴよんぴよんとはねた。夏の日ざしが水面にはね返って、まぶしかった。

「陽太くんは、なんでもできていいなあ。テストも、すぐ合格するんですよ」

ぼくは返事につまった。引き出しのおくの、たたんだ紙のことを思い出した。でも、結衣ちゃんにじつと見つめられて、首を横にふることはできなかった。うれしいような、はずかしいような気持ちで、ぼくは水面に目を落とした。

「……うん。次は、合格するよ」

家に帰ると、ぼくはげんかんのバッグから水着を出して、ベランダにほした。それから、ふろ場の洗面器に水をはり、顔をつけて、ゆつくり息をはいた。ぶくぶく、ぶくぶく。顔を上げて、もう一度つけた。

七 二十五メートル 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。